

# おおぞら

No.26 (143)

社会福祉法人 聖隷福祉事業団  
総合病院 聖隷三方原病院  
聖隷おおぞら療育センター

〒433-8558  
静岡県浜松市北区三方原町3453  
TEL 053-437-1467

発行責任者 荻野和功  
編集者 横地健治

2011年4月1日

## 施設での良い生活

所長 横地 健治

重症心身障害児施設に入所した人は、今の制度では、終生その施設で生活を送り、施設内生活がその人の全人生と云っていい状態となります。しかし、重症心身障害があれば、自分がどんな人生を送りたいか判断し、それを実践することはできません。もちろん、一般人でも、その人生は、生まれた時代や社会、家族の状況で大半は決まっています。自分で決めたと自覚できることはかなりあります。重症心身障害児(者)では、その介護者(入所者では施設職員)がその人に良かれと思ひ提供する生活体験の積み重ねがすべてと云うこととなります。

それでは、重症心身障害児(者)が良い人生を送っているかどうかは、どう決めたらいいでしょうか。これは答えの出ない問題です。一般人でも、これは答えられません。誰でも、最高の幸せと思ふ時も、地獄の日々だと思ふこともあるはず。良い人生か悪い人生かは何時どのように決めるのかわからないことです。しかし、重症心身障害児(者)にとつて何が良い人生なのかから

ないから何もしないではすまされません。何もしなければ、限られた受け身の体験しかない人生ということになってしまいます。それではいけないので、私たち施設職員には、これはこの人にとつて良いことに違いないという仮説を持つて具体的な働きかけをする職務上の義務があります。

一般人では、どんな時、良い人生を送っていると実感するのでしょうか。これも難しい問題であり、人により大いに違うでしょう。私自身では、こうなれば自分ほもつと幸せな気分になれるだろうと思ひ、これに向けて努力し達成された時は、間違いなく良い人生を実感します。人間は孤独には耐えられないものであり、他の人から表明される親愛の情を受け取る時は幸せな気分になります。同じく、他の人たちから賞賛されることもかなり嬉しいことです。これらは大多数の人に共通することではないでしょうか。これに対し、おもしろいものを食べて満足するといった本能に直結する快の感覚は良い人生を実感させるものとして劣ります。このような単純な

快の感覚は慣れてきて、より強い刺激を求めるようになってくるので、その効果は限定的です。そうすると、重症心身障害児(者)が達成感・満足感を感じる生活課題を提供することが良いことだと私は思ひます。その達成感・満足感の非言語的表出を私たち職員は正しく受け取らねばなりません。重症心身障害児(者)が今気持ちよさそうだと思う時、よく「いい表情をしてる」と言ひます。ただし、これは、姿勢や動きの様子も含めた全体で判断されていると私は思ひます。この表情のもとにある感情の意味はよくわかりません。単純な快なのか、達成感・満足感なのか、親愛の表現かは自明ではありません。私たちは、その人の普段の生活から、どんなことならわかり、どんなことに関心を持つのか、どんなことが好きで、どんなことが嫌いなのかを知るように努めています。こうした理解が深まれば、達成感・満足感を表す「いい表情」を認識することが可能になるはず。こうした表出を引き出せる生活課題はとりあえず価値があると考へていいのではないのでしょうか。

こうした生活課題を通して、

人(ここでは施設職員)との心のこもつたやりとりを経験すること自体に価値があると思ひます。職員が、相手を個の尊厳を持つた人格として大切に思ひ通働きかけていければ、その思ひは通じるはず。どんなに重い障害でも、人としての根源性から、こうした心を感じる能力は冒されにくいものだと思ひます。この最も根源的なコミュニケーションは良い生活の土台となるでしょう。

同じくその土台として、その人の体調をできるだけ良い状態に維持するように努めるのは当然です。もともと呼吸機能や消化管機能に問題がある人が多いので、健常者の感じる爽快な感覚はないのかもしれない。それでも、痛い、苦しいといった感覚を持つことが多ければ、良い生活にはなりません。こうした不快感も非言語的にしか訴えないので、私たちはそれを正しく読み取る力をつけねばなりません。そして、苦痛をもたらす原因を取り除かなければなりません。入所者に施設で良い人生を送つてもらおうという極めて難しい課題に対し、こんなふうにするばそれに応えられるのではないかと今考へています。